

【インド】—TM Hoffman

広い視野と即興精神を生かしてこそ



音文化研究・演奏家
TM・ホフマン

「余韻の短い三味線は気に入らないが、箏はどのインド楽器よりラーガに適している」とインド人が言う。音階構造や楽器など、日印間の音楽上の有意義な共通性は、以前本誌に掲載された05年6月号と08年11月号の投稿およびNPO日印音楽交流会のホームページ(www.jimea.com)を参照されたい。実践と理論における日印共同音楽開発への意志は東洋音楽学の三大権威であった岸辺成雄と田邊秀雄、小泉文夫の助言で出発した。その後、「音は神である」インド社会の協力を得て、現地で和楽器によるインド音楽などの演奏や教育活動がどんどん実を結んでいった。しかし、特に期待していた日本ではさほど進まない。どうして?

最近、インドに韓国姿が目立つ。1月に私が客員講師をしていたインド・アメリカ国際学校では学生の38%が韓国人だ。インドでは韓国製電化製品や自動

車が日本のそれに勝ち抜いている。そして、韓国楽器でラーガやインド舞踊との意欲的な共同活動が注目を集めている。日本と違って予想外の展開がよく起こるインド社会だが、日本の企業や芸術は、そんな「変化」を敬遠する傾向があるようだ。経済発展の現場である21世紀のアジアでは、相手の考え方や行動を近距離で経験しながら、即興精神を生かすことが大事なのだ。

専門性と集中力が重視される日本は、特に優れた製品を作り上げる。邦楽に目を向けると、独特の技法や楽譜がそれぞれの楽器で開発された。反面、視野の狭い専門主義に陥って、「木を見て森を見ない」のたとえのように、現状を把握できないでいる。○流、○長調：幾ら専門知識があっても、「邦楽か洋楽」の観察台からアジアの音文化を眺めるのであれば、それはどこまで役立つのだろうか。最新自動車でも伝統楽器でも、それを相手側に使って貰うためには、その相手を知るべきなのだ。

最近、インド進出を目指す大手日本企業のアジア部長に言われたこと。「私もインド・ビジネスはまだまだ基本を固める段階であり、文化の面に目を向ける訳にいかない」。インド各地にて何十回もの企画に共催・監督・共演の交渉をした経験をもってしても、音楽家が言う「インド・ビジネスの基本」は解ってもらえない。

日印貿易のための道を築くには、インド人の誇りである音文化が近道となる。インド人のノーベル賞学者の紹介で、私は2月にインド環境・資源総合研究所TERIで「音楽体系が教える経済・効率・生態の原理」を講演する機会を得た。説得力全開の箏は好評を博し、インド社会における諸分野の相互意識が音楽と科学を進展させると表明出来た。

諸分野間の協力と即興精神の働きが、今後の音楽芸術と世界平和に影響し合うだろう。



(上) 総合学校リシ・グルクラムの校長先生も参加する
(下) 同校で学生と太鼓名手との共演